

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

「コロナ禍で働くひとの声アンケート調査」

にご協力をお願いします！

新型コロナ禍により、福祉事業が果たしている役割の重要性がひろく明らかになりました。いっぽうで、社会的・基本的インフラとしての社会福祉の労働条件が保障されていないこともあきらかになりました。そうした実態を広く把握するため、総合社会福祉研究所では、「コロナ禍で働くひとの声アンケート」を実施しています。福祉に働くひとであれば、どなたでもスマホ等からご回答いただけます。分析結果は、本誌や研究会等で報告させていただくとともに、行政交渉やマスコミ等発信・活用いたします。



左のQRコード、または総合社会福祉研究所のホームページ
〈お知らせ欄〉からご回答いただけます。
ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

総合社会福祉研究所ホームページ
<http://www.sosyaken.jp/>



おおさか 生野コリアタウンぶら歩き

大阪市生野区にある生野コリアタウン。戦前からのコリアンの集住地で、現在でも住民に占める在日コリアンの比率は約17%。中心となる御幸通商店街は、地元住民をはじめ多くの観光客でにぎわう。大正時代、この地域周辺は急速に市街化していき、多くの中小零細企業が集積した。すでに韓国併合がおこなわれていたも^{みゆきどおり}とで、生活の苦しかった朝鮮半島の人々が、職を求めて日本に渡航してきていた。とくに「君が代丸」の就航により、済州島から大阪への渡航者が増大し、肉体労働や平野川分水路工事などの過酷な雇用需要を担った。



この同胞の人たちを相手にする商売をおこなう人たちが、御幸通の裏手で商売をはじめ朝鮮市場と呼ばれていた。いっぽう、御幸通で商売をしていた旧日本人店主たちが空襲をのがれ疎開したあと、この店主たちから店舗を買い受けた朝鮮市場のひとつたちが、現在の御幸通商店街を発展させていった歴史がある。

数年前から「第3次韓流ブーム」で、韓国で流行の化粧品や軽食を扱う店がぎっしり並び、若い女性たちでにぎわう。休日には約8000人が訪れ、その8割が10～20代を中心とした女性客という。



「大盛屋」は、コリアン夫婦が営業するキムチと韓国料理の店で、開業して17年。夫が学生時代に神戸の大学に留学し、そのまま日本に住み、子育ても終えた。新型コロナの影響で売上は半減しているということだが、通りの客に向かって呼びかける夫婦のあいさは元気いっぱい。店内では、なじみ客の女性2人が、幾通りものお皿から取り分けながら、ゆっくりと昼食を楽しんでいた。



「韓国食堂 スンデョン 順天」^{スンデョン}。ケジャン（ワタリガニ）が有名。少し話を聞かせてほしいと言ったら、いいよ～と言いながらとりあえず座ってと迎え入れてくれ、コーラと牡蠣キムチ、岩のり、明太子キムチ、イカフェと次々と出してくれた。くわえて、名物のケジャンとキンバも……ケジャンは、身を食べたあとミソが残った甲羅に白米とごま油、韓国のりを混ぜて食べる。お店を開業して22年、その前は衣料店を営んでいたという。北海道や沖縄からのお客さんもあるらしいが、コロナでかなり客が減ってしまったという。

（写真・文 塩見一弥）

●特集● あたらしく福祉職場にきたみなさんへ

この仕事でよかった。きっといいことがありますよ	青木 洋子	10
入居者さんやご家族に寄り添い、生活を支えたい	鈴木 美穂	12
支え・支えられながら笑顔あふれる私の居場所	西 加奈子	14
保育の学びはつきない！ みなさんも楽しんで	上村 幸那	16
大切な子どもを大事にしてくれる職員さんも、大切に	白井 道代	18
まずは自分を大切に、そして、困っている人の力になってほしい	S・H	20

●サブ特集●

対談！ 山家悠紀夫×唐鎌直義		
本当に社会保障・社会福祉にはお金はないの？！		22

●トピックス●

【PHOTO】ズームイン！ ありんこ保育園（大阪市旭区）	36
人間力とつながりでつくる保育の魅力を発信！	38
コロナ病床逼迫は医療政策の責任	42

●連載●

WORK WORK——わくワク——

油で揚げないお野菜チップス 社会福祉法人亀岡福祉会	
第三かめおか作業所	48

検証！ 介護保険20年

第7回 地域包括支援センターからみる介護保険	
日下部雅喜・安田 光良	50

かさねあい、はぐくみあう保育実践

人のあたたかさに触れ、つながりを大切に	三上 稀子	54
---------------------	-------	----

★新連載★JOB & ACTION 福祉保育労働組合

深刻化する福祉職員の疲労と「やめたい」思いが		58
アンケート結果で浮き彫りに		

★新連載★福祉の世界にとびこんだ私の履歴書

「社会福祉」のなかにある「希望」	湧井 規子	60
------------------	-------	----

阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎（21）

水野阿修羅	62
-------	----

相談室の窓から K男さんの行為に向き合うなかで

青木 道忠	64
-------	----

育つ風景 ちょっと危険なあそびの思い出

清水 玲子	66
-------	----

ひととしてあたりまえに生きたい

「なかまの里をつくる会」会長として（3）	清田 廣	68
----------------------	------	----

映画案内 『リチャード・ジュエル』

吉村 英夫	70
-------	----

現代の貧困を訪ねて

生田 武志	72
-------	----

生活保護費引き下げを争った「いのちのとりで裁判」

似らずとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

もうヨシロウ……	ラッキー植松	74
----------	--------	----

ホームレスから日本をみれば

ありむら潜	76
-------	----

花咲け！ 男やもめ

川口モトコ	77
-------	----

福祉のひろば

2021年4月号

●表紙の絵●
神門やす子



障害のある人と その家族の自立を ねがって

障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会(障全協)会長 新井たかね

重度心身障害のある娘と一緒に歩いてきて、はやくも四九年になります。娘の人生の節目節目で人間としての尊厳、人権を重んじる方々と出会うことができました。さらに同じ願いをもつ仲間たちと学びあい、育ちあい、歩いてくることもできました。

その歩みのなかから、今課題として二つのことを述べたいと思います。

一つは、障害のある仲間たちの青年期・成人期の大切な課題は、家族依存から自立した暮らしを築くことです。

自分で家族をつくるのがむずかしい娘が、入所施設「大地」の新しい家族のなかで、暮らしていることの意味の大きさを嘯みしめています。意思表示することがむずかしい娘ですが、娘の思いを代弁してくれる仲間たちに囲まれ、娘たちらしいゆたかな暮らしをと支援を惜しまない職員に恵まれ、日々の暮らしを築いています。

しかし、目を転じると、埼玉では入所施設の待機者が一六〇〇人を超えるなか、一か月に九か所もの施設を転々とさせられ命を落とした方がいます。家族での介護に限界を感じ、行政に相談すると「北海道の施設であればすぐに入れる」と言われ、体が凍る思いだったと話す方がいます。障害のあるすべての人たちの暮らしの場が、娘たちのようであってほしいと、その思いを強くしています。

早川和男さん(神戸大学名誉教授)の「住まいは人権」。初めて『福祉のひろば』を手にしたときから、胸に刻んできました。コロナ禍のなか「ステイホームと言われ、路上生活者に思いを馳せたか」と問われたことにも重ね、「住まいは人権」「暮らしは人権」、その意識の向上と保障を望みます。この課題は、福祉労働の地位の向上とも深く関わります。



あらい たかね

障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会（障全協）会長。全国障害児者の暮らしの場を考える会代表。『福祉のひろば』全国編集委員。2010年障害者自立支援法違憲訴訟勝訴の和解 原告 新井育代（娘）補佐人。

1984年～ 社会福祉法人みぬま福祉会理事。

1987年～2003年 埼玉県川口市市議会議員。

1946年 長野県生まれ。

二つは、障害のある子と一緒に歩いてきた母たちが、わが子のゆたかな暮らしを願いながら、自らも自分の人生を歩んでいける社会であってほしいことです。

新聞記者の取材を受けたときのことです。記者から名前と年齢を問われた友人たちは、子どもの名前と年齢を答えました。少しとまどう記者の姿をみながら、多くの母たちは、障害のある子どもの黒子として生きてきたのだと、そのとき気づかされました。

時を同じくして、埼玉の母たちは田中智子佛教大学准教授の学習会をもちました。講演のテーマ「障害のある人の暮らしと権利と家族のノーマライゼーション」をみて、私が探し求めてきたのは「家族のノーマライゼーション」、これだったと思いました。

講演のあと「自分のことも大切に考えていいんだと思った」「自分のことも見つめてみようと思った」と発言がつかまりました。

主催者代表は「障害のある子どもたちのゆたかな暮らしを願いながら、私たち親も自分の人生を大切に歩んでいきましょう」と、最後を結ぶ感動の学習会でした。

いっぽう、障全協がおこなった実態調査のなかでは、子どもの障害年金の家計の位置づけの問いに対し、「家計に欠かせない」と「欠かせないわけではないが必要」が、あわせて七割となりました。経済的にも依存しあわなければならない状況があります。

「私の年金、子どもの年金より少ないの」と言う、仕事を辞めたり、仕事に就けなかった母たち。近年、放課後デイやヘルパー利用で働けるようになって、圧倒的に非正規雇用の母たち。この課題に関わる社会保障・所得保障・女性の自立についても向き合いたいと思います。

あたらしく福祉職場にきたみなさんへ

今年の春から福祉の職場に入職するみなさん、おめでとうございます。私自身は、東日本大震災が起きた二〇一一年に総合社会福祉研究所に入職したので、育児・産休も含んでですが、『福祉のひろば』の編集にかかわって、今年で一〇年目になります。

保育、障害、高齢などの分野を超え、現場の実態と実践、研究をつなぐ「総合」誌であることが本誌の特徴ですが、本当に、さまざまな取材を経験させていただきました。たくさんの方のお話をうかがってあらためて思うのは、福祉の仕事はきわめて専門性が高く、奥が深く、実践する側も人としてたくさん成長できる、とつてもステキな仕事だということです。そして同時に、人々のいのちとくらしを支える不可欠な仕事であるにもかかわらず、国や自治体の制度・政策に振り回され、だれにでもできる専門性の低い仕事のように扱われるなかで、本当に必要な実践、大切にすべき実践を積み重ね、その専門性を高めていくことがとてもむずかしくなっているということです。

いまの社会は、モノやサービスをお金で買うことがあたりまえになり、その「価格」がモノやサービスの良し悪しをはかる大きな尺度になっています。しかし、医療や福祉はお金のあるなしではなく、その人が本当に必要な治療や支援を受けられるべきです。

ですが、「なにがその人にとって必要な治療や支援か」という尺度は、「価格」にくらべてとてもわかりにくいです。医療であれば手術前と手術後、検査前と検査後で「治った」ことが明確にわかることも多いと思いますが、福祉はもつとむずかしいと思います。

子どもの成長・発達は、日々保育士さんは目にしていますが、「これがいい保育だ」と数字で評価

できるものではありません。そのときは目に見えた変化が見えなくても、数年後に「あれでよかったんだ」と思えることもあります。一人ひとりの生活とねがいによりそった実践であればあるほど、画一的な指標で客観的に評価することはむしろかしくなります。

ですが、子どもであつても障害があつてもお年寄りであつても、自分自身の思いが大切にされ、受け止められる経験や生活は、ひととして根底をなすものです。なんでもかんでもお金ではかつてしまふいまの社会のなかで、そうした価値観を大切にできる福祉の仕事はやっぱりステキな仕事であり、また、かならず守らなければならぬ最後の砦であるとも感じます。そして、お金や経済成長とはちがう、一人ひとりのねがいに寄り添うという価値観の大切さとその実践を、もつともつと言葉にして発信していく必要があります。総合社会福祉研究所や『福祉のひろば』も、その一翼を担っていきたいと思っています。

現在、当研究所と福祉保育労働組合で、「コロナ禍で福祉に働くひとの声アンケート」をおこなっています。いのちとくらしを守る福祉労働者が、コロナ禍でどのような労働環境にあったのか、感染リスクを避けられないなかでどんな不安と緊張にさらされ仕事をつづけてきたのか、現場の実態と声を広く発信し、福祉現場の労働環境を改善していくことを目的にとりくんでいます。オンラインによるアンケートで、どなたでもお答えいただけます。「エッセンシャルワークにもかかわらず社会的評価が低すぎる」という回答も散見されます。社会に発信していくひとつの手段として、ぜひアンケートにご協力いただければ幸いです。

今年から入職されたみなさんも、福祉の仕事のやりがいやたいへんさを感じつつ、ぜひその思いや、もつとこんな実践がしたいというねがいを、たくさん発信してください。その発信の一つひとつが、福祉の仕事の社会的評価を引き上げ、ひいては労働環境の改善にもつながっていくはずです。

(編集主任)